

令和7年度

学校関係者評価報告書

令和8年3月

独立行政法人国立病院機構

都城医療センター附属看護学校

平成 19 年 10 月学校教育法施行規則改正により「自己評価」の義務化と「学校関係者評価」の努力義務化が規定された。

令和元年度より自己評価結果の客観性と透明性を高め、本校と密接に関係する方々との理解促進や協力連携による学校運営の改善を図ることを目的に学校関係者評価を実施しており、令和 7 年度の実施報告をする。

1. 学校関係者評価委員会

1) 学校関係者評価委員

- 小川淳子 (学校法人日南学園日南看護専門学校校長)
- 中山秋子 (元一般社団法人藤元メディカルシステム藤元病院看護部長)
- 内村美子 (同窓会白埴会)
- 山下恵子 (同窓会白埴会)
- 園田美千代 (在校生保証者)

2) 事務局

- 吉住秀之 (都城医療センター附属看護学校校長)
- 山本真由美 (都城医療センター附属看護学校教育主事)
- 一柳明日香 (都城医療センター附属看護学校実習調整教員)
- 後藤 広行 (都城医療センター附属看護学校学科調整教員)
- 西元 智子 (都城医療センター附属看護学校教員)

2. 評価対象期間

- 自：令和 7 年 4 月 1 日
- 至：令和 8 年 3 月 31 日

3. 実施方法及び公表

学校で取り組んだ自己評価を「自己評価結果」として冊子にまとめ、学校関係者評価委員に事務局より配布・説明を行った。学校関係者評価委員会にて、評価基準に基づき評価項目ごとに評価を実施した。その結果を報告書としてまとめ、学校ホームページにて公表する。

4. カテゴリー毎の評価結果

(3 点満点中)

- | | |
|----------------------|---------|
| 1) カテゴリー I：教育理念・教育目的 | 評価 3 |
| 2) カテゴリー II：教育目標 | 評価 2.73 |

・「カリキュラムループブック」が教員主導の目標設定に留まっており、本来の学生の自己評価ツールとして活用できていない点が課題として挙げられた。

3) カテゴリーⅢ：教育課程経営 評価 2.96

- ・急性期の病院であり、慢性期の看護が患者を受け持つことが難しいという問題があったことから慢性期看護を学べる科目を申請したことは評価できる。
- ・教員が授業準備のための時間が取れる体制の項目が 2.1 であり、余裕を持って準備ができるような時間が取ればということで改善を考えていくところは評価できる。
- ・研究授業を積極的に行っているところは評価できる。

4) カテゴリーⅣ：教授・学習・評価過程 評価 2.88

- ・シラバスを改定し、各回の教育内容やテキストの該当ページを細分化して明記し、学生が予習・復習しやすい構成と見直しをされていることは評価できる。
- ・試験と実習が重なる時期の負担感が大きく、学生の主体的な単位修得を支援するため試験計画の早期提示の工夫が必要である。
- ・暗記学習から専門的学習の切り替えについて学習のやり方、大事な部分のノートの取り方等について、ガイダンス等使いながら行っているところは評価できる。

5) カテゴリーⅤ：経営・管理過程 評価 2.93

- ・学校運営管理目標 3) NHO（国立病院機構）就職率 70%の目標がある。NHO の就職説明会を開催し、他の施設の案内をしたり、学生の意思を尊重しているところは評価できる。
- ・学生のメンタルサポートとして、教員の早期介入と外部の臨床心理士（月 1 回）によるカウンセリング体制を連携させているところは評価できる。

6) カテゴリーⅥ：入学 評価 2.8

- ・入学試験規程を見直し、より公平性のある選抜基準・評価表へ改定した。
- ・少子化の影響で指定校推薦・一般入試・社会人入試ともに志願者が減少傾向にある。対策として、次年度より新たに「公募型の推薦入学試験」を導入し、学生確保の取り組みを強化する。また、高校教諭対象学校説明会を開催など工夫されていることが評価できる。

7) カテゴリーⅦ：卒業・修了・進学 評価 2.96

- ・国家試験は直近 3 年間合格率 100%を維持しており、3 年生への看護師国家試験対策も実習と並行して進めていることは評価できる。
- ・就職の決定については 1 年次から取り組み、就職説明会の実施をしている。1 年生対象、2 年生対象で時期とか方法を変えて実施している。就職先については学生の自己決定を尊重している。進学（特に助産師学校）を希望する学生には手厚い受験指導を行っていることが評価できる。

- ・卒業率は非常に高い状況であるが、年間に留年者とか退学者もいる。個々の学生の状況に応じて面談をしながら希望を聞いて支援をしていることは評価できる。
- ・同窓会の模擬患者（SP）の協力を得て OSCE を実施している。次回は SP へのより具体的な事前設定の共有が必要とされた。

8) カテゴリー8：地域社会 / 国際交流 評価 2.67

- ・出前講座や中学生の職場体験受け入れ等で地域に貢献しているが、国際交流はコロナ禍以降停滞気味である。国際交流については今後の課題である。

9) カテゴリー9：研究 評価 2.73

- ・教員がシラバスの改定を行うなど時間を要し研究日の確保が難しかった。教員に良い環境になることを応援する。

6.総括

今年度は、2.67~3 の評価であった。学校関係者評価結果より、以下3点の課題が明確になった。

1.学習支援の最適化：

- ・「カリキュラムループブック」を学生自身の自己評価・目標設定ツールとして機能させる運用の見直し。
- ・高校から専門的学習への切り替えに戸惑う学生への学習ガイダンスの実施。
- ・実習と試験の過密スケジュールの緩和、および年間を通じた試験計画の早期提示。

2.教員の負担軽減：授業準備や研究活動に充てる時間を確保するための業務体制の改善。

3.演習の質向上：OSCE 実施時における、模擬患者（SP）への具体的な演技指導と事前打ち合わせの徹底。

教員による自己点検・自己評価

